

奥胎内ダム建設中止を願う

石 沢 進

今年の中ノ口川・五十嵐川の洪水に見舞われて、ダムの存在に疑問を感じた方々が多かったと思っている。大雨が降っても洪水防止にダムの果たす役割がそれほど効果的でなかった、との印象を受けている。ダムを建設する場合には100年に一度起きるであろう洪水の対策として施工しているという。今年の豪雨はその100年に一度の確立的な中した年であったかもしれないが、洪水防止にダムのあり方を考えさせられる。ダム建設にあたっては、十分考慮して、建設中のダムにも根本的な見直しが必要に思う。

中でも現在建設が進行中の奥胎内ダムの中止をお願いしたい。「奥胎内ダムを考える会」の詳細な調査から「奥胎内ダムを建設しなくとも洪水は防げる」との証拠の数々が指摘されている。

奥胎内ダムは洪水防止を主な建設の目的にしているが、ダムの効力が疑問視されていることに加えて、建設必要なしとの結論になれば、当然建設中でも再考する必要がある。

更に奥胎内ダムは、全国でも例を見ない「国内公園内」での着工である。ダムの建設で水没する地域は、ほとんど人手の加わっていない自然のままの生態系が温存している地域である。植物の分布上からも、この地域を特色づける貴重な生態系が存在するところでもある。

ダムは、その機能を保持する期間が100年位である。特に崩壊の多い奥胎内のダムは治水機能を果たす期間が短いであろうと推定されている。僅か100年以内で、何千年かにわたって温存してきた古来からの貴重な生態系がダム建設によって消失してしまう。極端な言い方をすれば、その貴重な生態系を無残に崩壊してしまって、みじめな残骸だけが後世の遺物になる。豊かな自然を後世に継承することが、新潟県の環境保全

の観点から目標であるはずなのに、それに逆行する行為以外の何物でもない。

国立公園に位置づけられている地域の開発には、国としても再考する必要がある。国の関係省庁にも検討課題として取り上げ、地域の貴重な生態系の保護に理解を求めたい。

最近、新潟日報と朝日新聞に掲載されたダムに関わる視点と投書を以下に紹介する。

新 潟 日 報

2004年(平成16年)10月5日(火曜日)

読む・窓

私の視点



三橋 允子(元)川内町 (奥胎内ダムを考える会代表)

「河川堤防の問題箇所 本県が全国四割 四百七ヶ所と突出」九月二十五日付本紙でも報道された。大半の県民が驚きと不安を感じたのではなからうか。県は「大部分は7・13水害で発生したもの、他県より厳しい点検方法を取ったため本県の箇所数が突出したのではない」と話している。

島町では圧倒的に破堤による家屋倒壊やはんらんによる水死者の方が多かった。不要との計算結果も出ている。地域の状況も出ている。多数のダム湖の状況も存じなだらうか。青黒い水がよぎみ、夏にはブクブクとメタンガスが発生している。いったん雨が降れば長期茶色の湖となる。平野に至る前に伏流水となり、

ダムより破堤しない治水を

「しかし、今回の緊急点検は目視によるだけであり、今年の水害で被害を受けた他の河川でも流下能力や堤体強度なども、もっと厳密な調査を行えば、問題箇所数はもっと多くなるかもしれない。」

度は治水を旨とする努力を行行政に求めたい。

一九六七年8・28水害時、胎内川の決壊、はんらんによる死者は皆無であった。でも安全河川との認識なの

に胎内川は記載されていない。水防警報を発令するた

め水位観測所もない。県

でも安全河川との認識なの

であろうか。

ダム計画の基本となる目

で黒川村三十一人、中条

年に一度の予想最大洪水流

量の計算にも誤りがある。

町長の良識と、交代される

新知事の発行力に期待して

いる。

洞窟はダムに力を入れるあ

たり、河川改修がおろそか

もあつたが、三桑市、中

さえ計画通りに完すれば

三桑でも越流だけで破堤

は目視によるだけであり、

今年の水害で被害を受けた

他の河川でも流下能力や堤

体強度なども、もっと

厳密な調査を行えば、問題

箇所数はもっと多くなるか

もしれない。

洞窟はダムに力を入れるあ

たり、河川改修がおろそか

私の視点



三橋 允子(70) 川西川町

(奥胎内ダムを考える会代表)

毎年、数百に及ぶ「水漏水」と記され、今回の水防計画」が県から発行され、残念ながら、一般と異なる。全国五位の土木費が投入されながら、なぜこんなことになったのか。五年前に一度、再評価された。県内各河川の危険箇所、県のホームページに公表、ほとんど行政側の説明が四ラックに分類表示されている。県管理河川だけで最も危険とされる「重点」が六十七カ所、総延長五十八キ、次のAランクが四百五十一カ所、四百二十一キ、三番目のBで千九百九十一カ所、千三百七キと、膨大な要改修区間が存在する。

疑問点多い奥胎内ダム継続

今回の水害で破堤した三糸市風南地区も、数十年前からAランクに指定され、「漏水実績あり」の記述のあった堤防である。予想される危険の項目には「欠陥...」

内川には重点もAもない。B評価地点は一九四九年から改修が継続されている。予想される最大洪水の流量計算根拠にも疑問がある。六七年八月の羽越水害時、胎内川は破堤も越流もせず...

「破堤防ぐ 治水大切」

新潟でシンポ

7・13水害とダム問題についてのシンポジウム「新潟の治水を考える」が三日、新潟市の万代市民会館で開かれた。報告に立った新潟大工学部の大熊孝教授(河川工学)は、破堤を防ぐ堤防整備の重要性を強調した。

シンポは、ダム建設に反対する市民団体「奥胎内ダムを考える会」などが主催した。

大熊教授は「越流(堤防を水が乗り越越える現象)した地域に比べ、破堤した地域の被害は格段に大きかった」とした上で「堤防下にコンクリート壁を設置する連続地中壁工法などを採用し、越流しても破れない堤防をつくるべきだ」と訴えた。また水源開発問題全国連絡会の嶋津暉之共同代表は、県が計画する奥胎内ダムについて「洪水時のピーク流量を必要以上に見積もっている」として必要性はないとした。

元会社員(新潟県三条市在住) 岩淵 一也



私の視点

今夏は各地で台風や豪雨による災害が相次いだ。被災地域では被害を受けた自宅の修繕もできずに過ごした人も多い。集中豪雨に襲われた新潟県中越地方も例外ではない。現場の体験を踏まえると、この災害は天災に人災が加わった面があると私はとらえている。

私が住む三条市を貫流する五十風川は、先の豪雨で水があふれ出して堤の底をさらい、市街地を「泥の海」に変えた。死者は三条

市だけでも9人にのぼり、家屋約7千戸が浸水した。私の家は五十風川の破れた堤防から約300メートル下流にある。水位は床上140センチに達した。水が引いた後には30〜40センチの泥土が残り、悪臭のなかで来る日も来る日も泥との格闘が続いた。その後は、ほごりに悩

◆新潟豪雨

ダムの管理は適正だったか

まされもした。この水害が本当に未曾有の豪雨による天災だけだったのだろうか。人災も加わったのではないかという疑念については、近所の被災者の多くも私と同じように感じている。

五十風川の上流には、二つのダムがある。総貯水容量1540万トンの笠堀ダム(65年完成)と同2110万トンの大谷ダム(94年完成)だ。大谷ダムが築かれた時は「ダムが二つになったから、もうだいじょうぶだ」と安堵し合ったものだ。この川と両ダムは新潟

流地点の堤防が決壊した。アメダスの観測によると、この日、三条市内の降雨量は208ミリ、1時間あたりの最大降雨量は51ミリだった。記録的な豪雨であったことは間違いない。

けでは納得しかねる。雨が降り出したのは堤防決壊の数日前からだ。この間の雨水がダムにどの程度貯水されていたのか、五十風川はどのくらいの水量でなら氾濫しないのか。ダムの貯水、放流は適切だったかどうか。それが知りたい。

この川は以前から危険な場所とみられていた。堤の幅は狭く、基底部分はほとんど補強されていない。信濃川との合流地点付近では川幅が狭まり、堤防内にも家屋が並ぶ。しかも、過去に水があふれ出た場所も手当てされていないようだ。確かに私たちは上流のダムの存在に安心感を抱いてはいたが、いざ水害を経験し

△放流を知らせるサインを聞いたが、下流の状況も熟知したうえで放流で、堤防すれすれまで水位が上がっても、あふれ出ることはない」と、さして不安は感じなかった。しばしばして、避難勧告が出されたことを知り、私は小学校に避難した。そして午後1時前、笠堀ダムから約25キロ

機能を発揮したと指摘している。そして、笠堀ダムは最大流入量が毎秒850トに対し、毎秒1200トを放流、差し引き7300トを貯水して「下流の氾濫量の軽減に寄与した」という。大谷ダムも毎秒4400トを貯水し、氾濫量の軽減に役立ったという。

しかし、こうした説明だけでは、いざ水害を経験し

てみると、河川の管理が十分でなかったのではないかと、この思いは消えない。本当に、ダムと河川の管理が適正に行われたのかどうか。さらに、河川改修を今後どうするのか。こうした疑問を持つ地元住民は各地にもいるのではないかと。疑問に答えるため、災害時には少なくともダムや河川の管理者側と住民側の協議機関を設けるような制度をつくるべきだろう。

投稿規定 1300字程度。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、〒104・8011朝日新聞社企画報道部「私の視点」係へ。電子メールはsiten@asahi.com 二重投稿、採否の問い合わせは遠慮ください。本社電子メディアにも収録します。原稿は返却しません。

水害防げず治水ダムの名泣く

片岡 喜功72 無職 (新潟市)

被災は三条市で、死者九人、浸水家屋七千戸。中之島町もまた大きな被害を受けた。これだけ甚大な被害が発生したにもかかわらず、その発生原因について、行政が明示していないのはなぜか。

七月十三日に起きた中越地方の集中豪雨による被害額は昭和四十二年災害に劣らないようである。

私の視点



塚野 正治(61) 新潟県 (無職)

被災は三条市で、死者九人、浸水家屋七千戸。中之島町もまた大きな被害を受けた。これだけ甚大な被害が発生したにもかかわらず、その発生原因について、行政が明示していないのはなぜか。

五十嵐川と刈谷田川の破堤原因を究明し、今後の整備を提言する識者会議が設置され、検討されている。

これは私が四十年以上も河川関係業務に従事してきたの感覚的な意見である。

治水は原理的には十分な幅の確保だと思ふ。破堤の根本原因は、河道の掘削と堤防のかさ上げで対応してきたことにあると思ふ。その結果、堤防決壊の危険性と同時に破堤した場合の被害が大きくなることになった。

破堤見越した河川整備必要

「人家のごく少ない溪流に高価な砂防ダムを何基も造らないで、宅地造成も含めて安全な場所に移転補償すべきで、土石流があっても被害がないようにすればよい」と職場で発言していたは、従って今後の

算出したくないのだろう。今後の河川整備は、破堤の検討も必要だと思ふ。またダム建設の理由は、水資源開発の名目も大きい。水資源開発の名目も大きい。水資源開発の名目も大きい。水資源開発の名目も大きい。

かさ上げた堤防は新・旧堤の接合部は永久に弱点となっていることを実感している。信濃川も阿賀野川も計画流量が変更され、か

この治水ダムは本来百年に一回起こるであろう大洪水から県民を守るために巨額の税金を投入して建設されたものである。